TADOKU JUNIOR　アンデルセン童話　★★★☆☆ ふつう　892語

The False Collar

つけえり

Hans Christian Andersen (tr. H. P. Paull et al.)（1846年の本）　原文そのまま　朗読：Claudia Salto

人の声の朗読
を聞く・Web版

どんなおはなし？　古くなったつけえりが、洗たくやアイロンのたびに出会う相手に次々とプロポーズ。でも、ふられてばかりで……。



There was once a fine gentleman, all of whose moveables were a boot-jack and a hair-comb: but he had the finest false collars in the world; and it is about one of these collars that we are now to hear a story.

It was so old, that it began to think of marriage; and it happened that it came to be washed in company with a garter.

“Nay!” said the collar. “I never did see anything so slender and so fine, so soft and so neat. May I not ask your name?”

“That I shall not tell you!” said the garter.

“Where do you live?” asked the collar.

But the garter was so bashful, so modest, and thought it was a strange question to answer.

“You are certainly a girdle,” said the collar; “that is to say an inside girdle. I see well that you are both for use and ornament, my dear young lady.”

“I will thank you not to speak to me,” said the garter. “I think I have not given the least occasion for it.”

“Yes! When one is as handsome as you,” said the collar, “that is occasion enough.”

“Don't come so near me, I beg of you!” said the garter. “You look so much like those men-folks.”

“I am also a fine gentleman,” said the collar. “I have a bootjack and a hair-comb.”

But that was not true, for it was his master who had them: but he boasted.

“Don't come so near me,” said the garter: “I am not accustomed to it.”

“Prude!” exclaimed the collar; and then it was taken out of the washing-tub. It was starched, hung over the back of a chair in the sunshine, and was then laid on the ironing-blanket; then came the warm box-iron. “Dear lady!” said the collar. “Dear widow-lady! I feel quite hot. I am quite changed. I begin to unfold myself. You will burn a hole in me. Oh! I offer you my hand.”

“Rag!” said the box-iron; and went proudly over the collar: for she fancied she was a steam-engine, that would go on the railroad and draw the waggons. “Rag!” said the box-iron.

The collar was a little jagged at the edge, and so came the long scissors to cut off the jagged part. “Oh!” said the collar. “You are certainly the first opera dancer. How well you can stretch your legs out! It is the most graceful performance I have ever seen. No one can imitate you.”

“I know it,” said the scissors.

“You deserve to be a baroness,” said the collar. “All that I have is a fine gentleman, a boot-jack, and a hair-comb. If I only had the barony!”

“Do you seek my hand?” said the scissors; for she was angry; and without more ado, she CUT HIM, and then he was condemned.

“I shall now be obliged to ask the hair-comb. It is surprising how well you preserve your teeth, Miss,” said the collar. “Have you never thought of being betrothed?”

“Yes, of course! you may be sure of that,” said the hair-comb. “I AM betrothed—to the boot-jack!”

“Betrothed!” exclaimed the collar. Now there was no other to court, and so he despised it.

A long time passed away, then the collar came into the rag chest at the paper mill; there was a large company of rags, the fine by themselves, and the coarse by themselves, just as it should be. They all had much to say, but the collar the most; for he was a real boaster.

“I have had such an immense number of sweethearts!” said the collar. “I could not be in peace! It is true, I was always a fine starched-up gentleman! I had both a boot-jack and a hair-comb, which I never used! You should have seen me then, you should have seen me when I lay down! I shall never forget MY FIRST LOVE—she was a girdle, so fine, so soft, and so charming, she threw herself into a tub of water for my sake! There was also a widow, who became glowing hot, but I left her standing till she got black again; there was also the first opera dancer, she gave me that cut which I now go with, she was so ferocious! My own hair-comb was in love with me, she lost all her teeth from the heart-ache; yes, I have lived to see much of that sort of thing; but I am extremely sorry for the garter—I mean

the girdle—that went into the water-tub. I have much on my conscience, I want to become white paper!”

And it became so, all the rags were turned into white paper; but the collar came to be just this very piece of white paper we here see, and on which the story is printed; and that was because it boasted so terribly afterwards of what had never happened to it. It would be well for us to beware, that we may not act in a similar manner, for we can never know if we may not, in the course of time, also come into the rag chest, and be made into white paper, and then have our whole life's history printed on it, even the most secret, and be obliged to run about and tell it ourselves, just like this collar.

むかし、ひとりのりっぱな紳士がいました。持ちものといえば、くつぬぎ器とくしだけでした。でも、世界一すばらしいつけえりを持っていました。これから聞くのは、そのつけえりのひとつのお話です。

そのつけえりはずいぶん古くなったので、結婚のことを考えはじめました。そしてたまたま、靴下どめといっしょに洗たくされることになりました。

「おや！」とつけえりは言いました。「こんなにほっそりして上品で、やわらかくてすてきなものは見たことがありません。お名前をうかがってもよろしいですか？」

「それはお教えできません！」と靴下どめは言いました。

「どちらにお住まいで？」とつけえりはたずねました。

けれども靴下どめは、とてもはずかしがりやでひかえめだったので、答えるのはへんな質問だと思いました。

「あなたはきっと帯ですね」とつけえりは言いました。「つまり、服の内側にしめる帯でしょう。役に立つうえに、かざりにもなるのがよくわかりますよ、かわいいおじょうさん。」

「話しかけないでいただけますか」と靴下どめは言いました。「わたし、そんなきっかけを少しでもあたえたおぼえはありません。」

「ありますとも！あなたのように美しければ」とつけえりは言いました。「それだけで十分なきっかけですよ。」

「お願いですから、そんなに近よらないでください！」と靴下どめは言いました。「あなたって、男の人たちにそっくりなんですもの。」

「わたしもりっぱな紳士ですからね」とつけえりは言いました。「くつぬぎ器とくしを持っているんですよ。」

でも、それはほんとうではありませんでした。それを持っているのはご主人だったのです。つけえりは、じまんしたのでした。

「そんなに近よらないで」と靴下どめは言いました。「なれていないんです。」

「お高くとまって！」とつけえりはさけびました。そのとき、つけえりは洗たくおけから取り出されました。のりをつけられ、日なたのいすの背にかけられ、それからアイロン台の毛布の上にのせられました。そこへ、熱いアイロンがやってきました。「おくさま！」とつけえりは言いました。「すてきな未亡人のおくさま！わたし、すっかり熱くなってきました。すっかり変わってしまいました。しわがのびてきました。わたしに穴があいてしまいますよ。ああ！どうか、わたしと結婚してください。」

「ぼろきれ！」とアイロンは言って、つけえりの上をいばって通っていきました。アイロンは、自分は蒸気機関車で、線路の上を走って貨車を引っぱるのだと思いこんでいたのです。「ぼろきれ！」とアイロンは言いました。

つけえりはふちが少しぎざぎざになっていたので、長いはさみがやってきて、ぎざぎざのところを切り取ることになりました。「おお！」とつけえりは言いました。「あなたはきっと、オペラでいちばんのおどり子さんですね。なんてみごとに足をのばすんでしょう！こんなに優雅なおどりは見たことがありません。だれもあなたのまねはできませんよ。」

「知っていますわ」とはさみは言いました。

「あなたは男爵夫人になるのがふさわしい方です」とつけえりは言いました。「わたしが持っているのは、りっぱな紳士のご主人と、くつぬぎ器と、くしだけです。これで男爵の位さえあればなあ！」

「わたしに結婚を申しこむつもり？」とはさみは言いました。はさみはおこっていたのです。そして、あっというまに、つけえりをチョキンと切ってしまいました。それで、つけえりはもう使いものにならなくなりました。

「こうなったら、くしに申しこむしかないな。おじょうさん、あなたはよく歯をきれいにたもっていますね、おどろきました」とつけえりは言いました。「婚約しようと思ったことはありませんか？」

「もちろん、ありますとも！」とくしは言いました。「わたし、もう婚約しているんです――くつぬぎ器とね！」

「婚約だって！」とつけえりはさけびました。もう申しこむ相手はだれもいなくなったので、つけえりは、結婚なんてつまらないものさ、とばかにしました。

長い時がたって、つけえりは製紙工場のぼろきれ箱に入れられました。そこにはぼろきれがたくさん集まっていて、上等なのは上等なの同士、そまつなのはそまつなの同士で分けられていました。そうあるべきとおりにね。みんな話すことがたくさんありましたが、いちばんしゃべったのはつけえりでした。なにしろ大のじまん屋でしたから。

「わたしには、それはそれはたくさんの恋人がいたんですよ！」とつけえりは言いました。「おちおちしていられないほどでした！たしかに、わたしはいつも、のりのきいた、りっぱな紳士でしたからね！くつぬぎ器もくしも持っていましたが、一度も使ったことはありません！あのころのわたしを見せたかった。横になったときのわたしを見せたかったなあ！初恋の人は決してわすれません――それは帯で、とてもほっそりして、やわらかくて、かわいらしくて、わたしのために洗たくおけの水の中に身を投げたんです！それから未亡人もいました。まっ赤に熱くなったんですが、わたしは黒くなるまで放っておきました。それから、オペラでいちばんのおどり子もいました。今もついているこの切りきずは、彼女につけられたんです。それはそれはおそろしい人でした！わたし自身のくしも、わたしに恋していました。むねのいたみで歯がすっかりぬけてしまったんです。そう、わたしはそういうことをたくさん見てきました。でも、靴下どめ――いや、帯のことです――洗たくおけに入ったあの人には、ほんとうにすまないと思っています。わたしは良心にやましいことがたくさんあります。まっ白な紙になりたいものです！」

そして、そのとおりになりました。ぼろきれはみんな白い紙になりました。そしてつけえりは、ちょうど今ここに見えている、このお話が印刷されている白い紙になったのです。それは、つけえりが、ほんとうは起こらなかったことを、あとでひどくじまんしたからでした。わたしたちも、同じことをしないように気をつけたほうがいいでしょう。だって、いつかわたしたちも、ぼろきれ箱に入って白い紙にされ、いちばんひみ

つのことまで、一生の話をすっかりそこに印刷されて、このつけえりのように、自分でそれを言いふらしてまわらなければならなくなるかもしれないのですから。

たんご と クイズ つけえり

collar えり（つけえり）	**garter** 靴下どめ	**hair-comb** くし
box-iron アイロン	**scissors** はさみ	**boot-jack** くつぬぎ器
paper 紙		

Q1 つけえりが、洗たくのときに最初に話しかけた相手は？

① アイロン　② 靴下どめ　③ はさみ

Q2 くしは、だれと婚約していた？

① くつぬぎ器　② つけえり　③ はさみ

Q3 さいごに、つけえりは何になった？

① 新しいシャツ　② ぬいぐるみ　③ 白い紙

こたえ

Q1 ②　つけえりは、いっしょに洗たくされた靴下どめに名前をたずねましたが、相手にしてもらえませんでした。

Q2 ①　くしは「わたし、もう婚約しているんです――くつぬぎ器とね！」と答え、つけえりはまたふられました。

Q3 ③　ぼろきれはみんな白い紙になり、つけえりは、このお話が印刷されている紙になりました。

原田英語の多読ベストジュニア

本物の英語の絵本 1,000話以上を、原文・人の声の朗読・和訳つきで。ゲーム・なぞなぞも。ぜんぶ無料・登録なし。

haradaeigo.com/tadokubestjr/

出典　英文：原文そのまま（1語も書きかえていません）。Project Gutenberg 電子書籍 #1597（Hans Christian Andersen (tr. H. P. Paull et al.)、1846年）。パブリックドメイン。

挿絵：この本には挿絵がないため、場面をイメージして AI（Codex）で描いた絵です。

朗読（Web版）：Claudia Salto（LibriVox のボランティア。パブリックドメイン）

和訳・クイズ：AIと人が作成。AIは３重チェック。人の目でも順次確認しています。